

英国における障害児者へのスヌーズレンの福祉実践

—WORCESTER SNOEZELEN CENTER の取り組み—

姉 崎 弘*

スヌーズレン (SNOEZELEN) は、1970年代にオランダで生まれ、その後ヨーロッパやアメリカ、カナダ、スウェーデンなどに広がり、近年わが国でも、重症児施設や知的障害者施設を中心に取り入れ実践するところが増えてきている。英国では、特に1990年代に入ってからスヌーズレンの実践と研究が盛んに行われるようになり、病院や特殊学校、施設のデイケアなどで、知的障害者や痴呆老人、精神障害者などに幅広く適用され、その効果が指摘されている。今日では、英国において世界的に最も先進的な取り組みが行われている。本稿では、英国のチャリティによるコミュニティ・リソースとして唯一運営されている WORCESTER SNOEZELEN CENTER を訪問し、あらゆる障害児者とその家族に対して、その幅広いニーズに応じたさまざまなセラピーとレジャーの場を提供し、障害児者と家族の生活の質を高めるスヌーズレンの福祉実践の取り組みを紹介すると共に、わが国の今後の課題について考察を加えた。

キーワード：スヌーズレン、障害児者、セラピー、レジャー、福祉実践

1 はじめに

スヌーズレンは、1970年代にオランダで始められた障害児者への新しい関わり方の理念¹⁾である。その後ヨーロッパやアメリカ、カナダ、スウェーデン^{2) 3)}などに広がり、近年わが国でも、重症児施設や知的障害者施設を中心に取り入れ実践するところが増えてきている^{4) 5)}。スヌーズレンでは、障害児者がまわりの人たちから援助される人、訓練を受ける人として、受け身の立場でのみとらえるのではなく、障害児者がその時を自分なりに好きなように選択して楽しみ、充実したひと時を過ごすということを重視している¹⁾。この理念は、人が人として生きていく上で最も基本となる考え方である。

英国では、1990年代に入ってからスヌーズレンに関する実践や研究が盛んに行われるようになった^{6) 7) 8)}。そして今日では、オランダをしのぐ700ヶ所以上の大小のスヌーズレンが創設されており⁹⁾、病院や特殊学校、施設のデイ

ケアなどで、知的障害者や痴呆老人、精神障害者などに幅広く適用され、その効果が指摘されている。

筆者は、昨年10月に英国のスヌーズレン施設等をいくつか見学する機会を得た。本稿では、その中から特に国際的に先進的な実践を行っているウースター・スヌーズレンセンター⁹⁾について紹介する。当センターの活動は、約10年ほど前にチャリティとして始められた。年々資金を確保してスヌーズレン・ルームなどを増設し、地域に住む障害児者とその家族のさまざまなニーズに応えるべくその充実を図ってきている。ここでの取り組みは、今後のわが国の障害児者の生活の質を高める教育や福祉を考える上で、貴重な示唆を与えてくれるものと考えている。

ウースター・スヌーズレンセンターは、ロンドンのパディントン駅から北西に列車で2時間半ほど行った Foregate Street Station の駅から車でおよそ10分くらいのところにある。ウースターは、地理的にはバーミンガム南部に位置する一地方都市である。ここでは、身体的、知的、精神的、あるいは感覚的に障害のある、あらゆる年齢層の人々を対象に、その特別なニー

* 三重大学教育学部障害児教育講座

ズを満たすためのレジャーとセラピーの場を提供している。そして障害児者のために多重感覚刺激環境を創出するスヌーズレン・ルームがいくつも用意されている。また専門のスタッフ4名が常時センターの運営と利用者およびその家族の支援にあたっている。

2 スヌーズレンとは何か

スヌーズレン (SNOEZELEN) という用語は、2つのオランダ語、すなわち、一つは'SNUFFELEN'「くんくん臭いをかぐ」という意味と、もう一つは'DOEZELEN'「眠たくなる」という意味の2つの言葉からなる合成語である。今日では、一般的な用語になっている。スヌーズレンの概念は、感覚障害と学習上のさまざまな障害のある人々に、リラクゼーションとレジャーの施設を提供する目的のもとに、オランダで発展した。その基本となる考え方は、利用者と家族、ないし介護者が相互に共感し合いながら関わり、相互に楽しい感覚的な経験を通じて、信頼とリラクゼーションに満ちた雰囲気を作り出すところにある。スヌーズレンの環境に身を置くことは、特に知的な活動を必要とせず、人間の持っている原始的な感覚を優しく刺激することによって、脳の機能を活性化させるものである。

3 スヌーズレンの目的

スヌーズレンの目的は、楽しい感覚的な経験を通じて、信頼とリラクゼーションに満ちた環境を十分に体験するところにある。障害のある子どもや成人の方が、スヌーズレンの環境の中に入っていくと、自分で見たり、聞いたり、嗅いだり、触ったりする全てのものは、活動的な反応を活発にし、自分自身で環境をコントロールしたいという気持ちや自分自身で試してみたいという気持ちを助長する。次のような感覚刺激、たとえば、プロジェクターで映し出された画像イメージ、視覚的にいろいろな色に光る光ファイバーやゆっくりと数多くの光の玉を回転

させるミラーボール、水泡を出しながら美しい色が順次優しく変化するバブルチューブ、アロマストロームから送風される揮発性エッセンシャルオイルの気分をさわやかにする香り、壁面で手や指などで触知できる触覚教具、そして心を和ませリラクゼーションを導く音楽などを使用することで、人間の五感を適度に刺激するさまざまな空間が創り出される。

4 スヌーズレン・ルームの紹介

以下に、ウースター・スヌーズレンセンター内にある7つのルームとガーデンを中心に解説する。

4-1 ホワイトルーム

ホワイトルームで創られる環境は、一般的に「真のスヌーズレン」と言われる。その雰囲気がかもし出す光と音楽とアロマの世界は、バブルチューブ、ウォーターベッド、そして光ファイバーの4色の色の变化、リラクゼーションミュージック、アロマセラピーの香りを使った感覚に優しい刺激のある安らぎの空間である。その効果は、利用者にとってきわめて穏やかなものであり、くつろいだりリラックスした気分にしてくれる(写真1)。

4-2 ダークルーム

ダークルームは、ここでは比較的小さなスペースを利用しているが、ルームの上部に備え付けた紫色に光るブラックライトを使用して暗いルームでさまざまな視覚刺激を目で楽しむことができる。たとえば、アルファベットの文字がさまざまな色に光ったり、光ファイバーで光るカーペットの素敵な道を歩くことができる。また手で自分の好きな色の付いた手形に触れることで、光る星空の色をそれと同じ色に変えたりすることもでき、自らさまざまな光の刺激を楽しむことができる(写真2)。

4-3 水治療ルーム

円形のプール内には、ジャグジーが付いてい

て、利用者がこのプールに入ると、皮膚に水の温かくて優しい心地よさやジェットの水の柔らかい圧力、バチャバチャという泡の音や感触、さらに介護する人の身体的な接触といった触覚刺激を提供してくれる。またプールの壁面には、プロジェクターで映し出された優しく回転する視覚的なイメージが、安らかな効果のある音楽と共に、利用者に十分に鎮静的な作用のある時間と体験とをもたらしてくれる（写真3）。

4-4 マッサージルーム

ボディ・マッサージの他にアロマセラピー・マッサージを受けることができ、その優しい鎮静作用は、普段の生活における緊張とストレスから利用者を開放してくれる。誰でもマッサージを受けられるが、ストレスに満ちた生活を送っていることの多い人々、特に、両親や介護者に対して大変効果的で、ストレスを軽減させる作用と共に明日への新たな活力を与えるものとなっている（写真4）。

4-5 ソフトプレイルーム

このルームは床と四方が丈夫なクッション性の素材でつくられている。大きなボールプールやトランポリンを持ち、円筒形の柔らかいクッションの中を滑ったり、よじ登ったり、隠れたりすることができる。ボールを投げたり、壁に体ごとぶつかっても安全で、さまざまなダイナミックな遊びができる。これは体を動かすことが大好きな利用者にとっては大きな楽しみであるばかりではなく、リラックスするにも良い場所を提供する。このセンターを訪れる人々は、このルームで相互にやり取りする遊びを十分に楽しむことができる。またスポットライトを照射したミラーボールから発する光は、視覚的な活性刺激を生み出している（写真5・写真6）。

4-6 触知できる廊下

各ルームをつないでいる廊下の部分には、その壁面にさまざまな工夫が凝らされている。

例えば、ツリーチャイムのような手で軽く触れると音が鳴る楽器やいろいろな感触を楽しめ

るさまざまな素材でできた「手のひら形」のもの、また反対側の壁面には、動物の絵とそのすぐ下にスイッチボタンが付いていて、スイッチを押すとその動物の鳴き声が聞こえるという仕掛けになっている。この廊下は感覚的な驚きに満ちていて、おそらく視覚に障害のある利用者に対して特に刺激的な空間となっている。このようにあらゆる障害のある利用者に対して、多様な発達を促進させる感覚刺激が数多く用意されている（写真7・写真8）。

4-7 ミュージックルーム

ミュージックルームは、最近設置された最も新しいルームである。設置されたマイクロフォンの前で手や体、物を動かすと、センサーが感知していろいろな音階の音を奏でることができるばかりではなく、音の種類をピアノやフルート、ドラムなどのさまざまな楽器の音に変換することも可能である。このようにして、どのような障害のある利用者でも、体の一部をわずかでも動かすことができるならば、自ら作曲し演奏することが可能である。特に、行動障害のある自閉症の利用者などが、このルームでセラピーを受けたりしている（写真9）。

4-8 スヌーズレン・ガーデン

センターの建物の中庭に、スヌーズレン・ガーデンがある。スペースはあまり広くはないが、小さな空間を有効活用して憩いの空間を創出している。庭にはさまざまな木々があり四季折々の自然の変化を味わうことができる。また利用者がくつろげるようにベンチやブランコ、野鳥の巣などが置いてあり、利用者の心を明るく軽やかにしてくれる。ここは自然そのものをセラピーに取り入れたスヌーズレン・ガーデンである。このガーデンは、窓越しに応接間からも見ることができるようになっている（写真10）。

上記の他に、小さな空間を有効に活用して、テレビやビデオを鑑賞できる「映像コーナー」もある。このように、各スヌーズレン・ルームはあらゆる角度から人間の五感を適度に刺激するよう

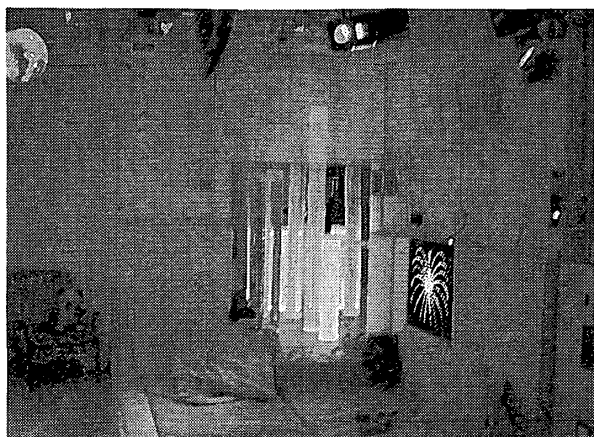


写真1 ホワイトルーム

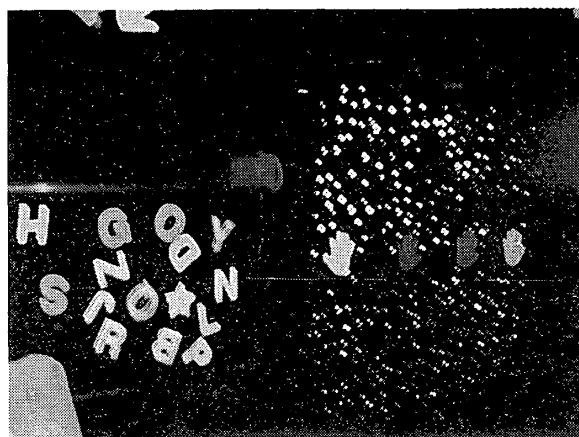


写真2 ダークルーム

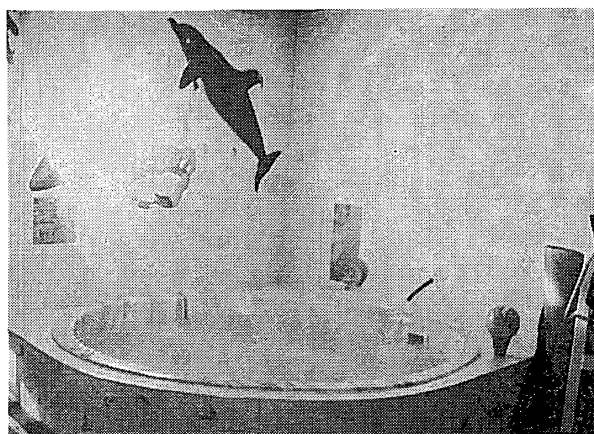


写真3 水治療ルーム

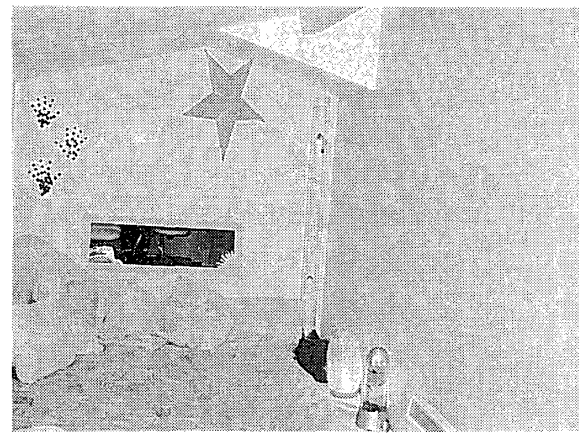


写真4 マッサージルーム

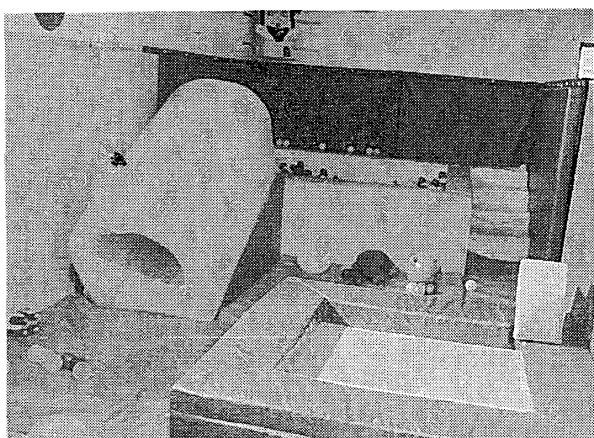


写真5 ソフトプレイルーム

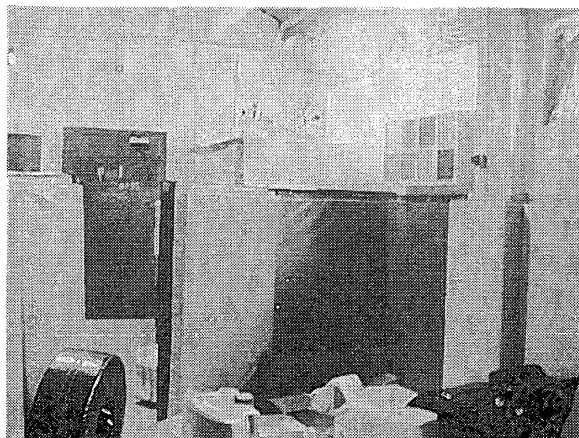


写真6 ソフトプレイルーム

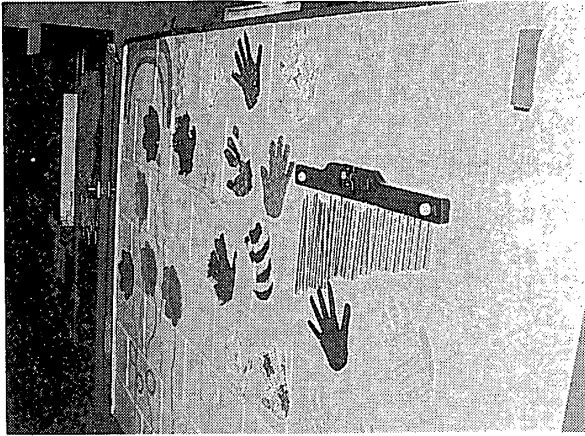


写真7 触知できる廊下

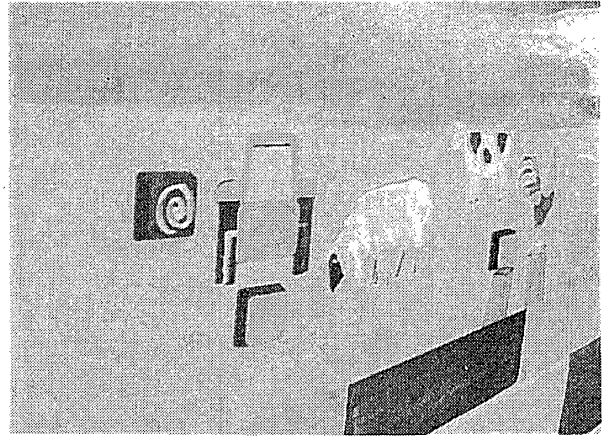


写真8 触知できる廊下



写真9 ミュージックルーム



写真10 スヌーズレン・ガーデン

につくられている。またセンターの入り口を入ると、すぐに応接間があり、利用者がくつろいだり、飲み物を飲んだり、おしゃべりを楽しむための場所になっている。ここで、窓越しに外の美しいガーデンを見ながら、昼食を食べることもできる。

5 ウースター・スヌーズレンセンターの利用について

当センターは、月曜日から土曜日まで、週6日間、午前9時から午後7時まで利用することができる。個人でもグループでも比較的 low cost で利用することができる。ただし、土曜日と平日の午後5時以降は若干料金が高くなる。グループで貸し切れることもできるし、大勢の人たちで誕生日のパーティーを開くこともできる。

センターの利用者は、週におよそ300人程度であるが、利用者は年々少しずつ増えてきている。利用者の多くは、地元の人々の他、バーミンガムやグロスター、オックスフォードのような少し離れた所からも来ている。30~40マイルほど離れた所から車で片道1~1.5時間掛けて通ってきている人もいる。利用者には、例えば、特殊学校に通っている障害のある子どもたちが保護者と共に放課後や休日に利用しに来たり、成人の障害者がレジャーの場としても利用している。

6 まとめ

スヌーズレン・ルームを持つ所は、英国では一般的に、たとえば、病院の中や特殊学校（スペシャル・スクール）、さらにデイ・センターな

どがあげられる。しかし当センターのように、チャリティのコミュニティー・リソースとして設置され運営されている所は、英国ではここだけであると言われる。あらゆる障害児者とその家族が五感を適度に刺激するさまざまなスヌーズレン・ルームでセラピーとレジャーを十分に楽しめる場（地域のリソース）を持てるのは理想的である。

わが国では、重症児施設や知的障害者施設、さらに近年養護学校¹⁰⁾でもスヌーズレンがようやくあちらこちらで実践されるようになってきたが、まだまだ量・質共にその充実はこれからの課題である。特に、わが国では、スヌーズレン・ルームといっても、施設や養護学校で1つか、多くても2つくらいしか持っていないのが現状である。すなわち、ホワイトルームを中心に、それとソフトプレイルームを持つくらいである。

今後、わが国でも英国の取り組みを参考に、スヌーズレンを重症児施設や知的障害者施設、養護学校ばかりではなく、痛感患者などがある病院の中や精神障害者、痴呆老人、さらに心理的に不安定傾向のある健常児者などにも幅広く利用できるような、さまざまな場所での設置と取組みが求められる。また障害児者が、地域の中でいつでもセラピーを受けられ、レジャーを楽しむことができるような、障害児者の生活の質を高められる、さまざまなルームを持つ「スヌーズレン・センター」のようなリソースを少しずつ全国各地に設置し、積極的な利用を啓発していくことも課題であると考えられる。そのためには、スヌーズレンの理念と効果を正しく社会に普及していくための研究が急務であるといえる。

※なお、本研究は、一部、科学研究費補助金基盤研究（代表姉崎 弘）の援助を受けて行われた。

謝 辞

本研究に際して、快く調査にご協力をいただいたウスター・スヌーズレンセンターのマネージャーである Penny Bews 氏ならびにスタッフ

の Becci Read 氏に心からお礼申し上げます。

参考文献・資料

- 1) Hulsegge, J. & Verheul, A. SNOEZELEN – another world – ROMPA in the U. K. 1987
- 2) 鈴木清子 第10回海外研修報告書 社会福祉法人清水基金 pp. 6–30, 1991
- 3) 河本佳子 スウェーデンのスヌーズレン 新評論 2003
- 4) 八代史章, 他 スヌーズレン法を応用した重症心身障害児(者)への感覚刺激指導法の開発 読売光と愛の事業団 第26回重症心身障害児(者)の療育に関する研究助成金研究報告書 pp. 55–63, 1997
- 5) 鈴木清子 知的障害を持つ人自身の活動 – スヌーズレン – 日本スヌーズレン協会 pp. 1–21, 2001
- 6) Hutchinson, R. THE WHITTINGTON HALL SNOEZELEN PROJECT. North Derbyshire Health Authority 1991
- 7) Gallaher, M. & Balson, M. Snoezelen in Education. Hutchinson, R., Kewin, J. (Eds.) Sensations and Disability: Sensory Environments for Leisure, Snoezelen, Education and therapy. Chesterfield: ROMPA, pp. 129–137, 1994
- 8) Ashby, M., Lindsay, W., Pitcaithly, D., Broxholme, S. and Geelen, N. Snoezelen: its Effects on Concentration and Responsiveness in People with Profound Multiple Handicaps. British Journal of Occupational Therapy 58 (7), pp. 303–307, 1995
- 9) WORCESTER SNOEZELEN – A Multi-Sensory Environment for People with Disabilities – (<http://www.blacksalmon.co.uk/Snoezelen/>) 2003
- 10) 姉崎 弘 重症心身障害児教育におけるスヌーズレンの有効性について – 肢体不自由養護学校の自立活動の指導に適用して – 日本重症心身障害学会誌 第28巻 第1号 pp. 93–98, 2003